



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	高校生が認知する高齢者役割 ~ 宮古・八重山の高校生を対象に ~
Author(s)	浅井, 玲子
Citation	琉球大学教育学部紀要(73): 97-102
Issue Date	2008-08
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7254
Rights	

高校生が認知する高齢者役割 ～宮古・八重山の高校生を対象に～

浅井 玲子

High School Students' Acknowledgment of Senior Citizens' Roles

～Focusing on High School Students in Miyako and Yaeyama～

Reiko ASAI

I. 緒言

高齢期は誰もが迎えることができる時代となった。現在の高齢社会について学び、自分自身の高齢期について考え、今をよりよく生きることが課題となる家庭科教育においても、高齢者（期）に関する内容の充実が図られてきた。今後も社会背景を鑑みると、高齢者に関する学習内容は重要視されるものと予測できる。家庭科における高齢者と生徒の交流などに関する研究も進められてきている（守谷 1985）（綿引, 牧野 1993）（久保, 日隈 1955）（荒井他 1996）（渡辺他 1996）（永原 1997）（山川, 倉盛 2003）（石川 2005）が、離島・僻地を対象としたものはほとんど見られない。

最近の高齢者研究ではプロダクティブ・エイジングやソーシャルサポートの授受という立場が注目されるようになってきた（前原, 竹村, 浅井 2006）。心理学研究においては、前原ら（前原, 金城, 稲谷 2004）が、沖縄の孫と祖父母の関係について検討している。その結果、祖父母が孫と多様な役割を果たしながら関わっていることや高齢期研究においては地域を視野に入れた研究が必要であることを示唆している。

これまで沖縄は、日本本土とは異なる歴史的地理的条件から、独特な文化的価値観や高齢者認知があるとされてきた。渡邊（1993）は沖縄の老人

の文化について、沖縄では老人は必要不可欠と記述し独特の役割を担っているとしているし、前原（2004）は東京と沖縄における祖母の役割認知の違いを明らかにしている。文化によって異なる、あるいは差はあるが、人の各成長段階という観点からすると集団、社会に属している限り、役割というものは存在する。高齢期を自分自身の現在の延長線上にある人生のひとつのステージとして捉えるとき、現在の地域に共に暮らす高齢者役割を高く認知できる事は、現在をより良く生きる事とも関連して来るであろう。

浅井（2007）は、高齢者の人間的尊厳理解の一側面として、沖縄の高校生の家庭科教育における学習経験と高齢者役割認知について明らかにした。沖縄の孫一祖父母間の機能認知尺度（前原 2000）をベースにしながら学習経験の有無による役割認知の差について測定し因子分析した結果、「人生展望」「情緒的援助」「しつけ・社会化」「文化伝承」の4つの因子が抽出された。それを尺度として性別、出生順位（長男長女であるか）、高齢者との同居、高齢者に関する学習経験のうち、役割認知差が最も大きかったのは、高齢者に関する学習経験の有無であり、高齢者と直接ふれあう学習経験が役割認知得点を有意に高くしていた。授業の方法では、生徒の側からの能動的な取り組みがある学習経験が有る者の得点が有意に高かった。

* 琉球大学教育学部

しかし、離島を含む沖縄県内の高校生の平均的データを用いているために、離島である宮古や八重山の高校生が持つ高齢者役割認知の特徴を描くことはできなかった。そこで、本研究では沖縄の高校生全体と宮古・八重山の高校生の比較検討を行う。

そこで、本稿では、第一に、宮古・八重山の高校生が認知する高齢者役割尺度を検討し、第二にその役割認知に影響を与える家庭科の学習内容との関連を明らかにしたい。さらには、沖縄県全体の高校生との比較によって、宮古・八重山の高校生の高齢者役割認知の特徴を明らかにし、今後の宮古・八重山の高等学校家庭に関する教科指導の基礎的資料を得ることを目的とする。

II. 研究方法および分析方法

1. 研究方法、対象者および調査期間

沖縄県宮古の高等学校1校、八重山の高等学校1校の男女計103人を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施した。アンケート用紙の配布は2005年5月に行い、全校回収が終了したのは2005年9月であった。その間に各校の家庭に関する科目の授業で家庭科教諭によって実施・回収された。有効回収数は103部（100%）であった。

対象者の属性を表1に示す。

表1 対象者の属性（宮古・八重山）

項目	性別	男子 人数 (%)	女子 人数 (%)	合計
出生順位	長男・長女である	29 (52%)	27 (48%)	56 (100%)
	長男・長女でない	22 (47%)	25 (53%)	47 (100%)
	計	51 (50%)	52 (51%)	103 (100%)
祖父母との同居	している	12 (67%)	6 (33%)	18 (100%)
	していない	39 (46%)	46 (54%)	85 (100%)
	計	51 (50%)	52 (50%)	103 (100%)
高齢者に関する学習経験	有	28 (48%)	30 (52%)	58 (100%)
	無	19 (33%)	21 (67%)	40 (100%)
	計	47 (47%)	51 (53%)	58 (100%)

2. 調査内容

調査項目は、①対象者の属性 ②高齢者について家庭科で経験した学習 ③高齢者の役割に関する項目等である。

これまでの学習経験は『高齢者と直接ふれあう学習』として「高齢者が学校を訪問（招く）」「地

域の高齢者との交流」「施設の高齢者との交流」「インタビュー」とし、『高齢者と直接はふれあわない学習』として「知識の説明（講義）」「体験グッズ」「介助体験（生徒同士）」「調べ学習」の項目とし、その他も含め、経験のあるものすべてを回答してもらった。高齢者役割認知尺度は前原ら（2000）を参考に作成した33項目について4点評価尺度で測定した。「よくあてはまる」を4、「少しあてはまる」を3、「あまりあてはまらない」を2、「全然あてはまらない」を1とし、1～4までの4段階から評定を求めた。ここでは、得点が高いほど役割認知度が高いことを示している。

III. 結果と考察

1. 高齢者役割尺度の検討

高齢者役割尺度33項目の平均値、標準偏差値を算出した。そして天井効果およびフロア効果が見られた4項目を除外した。なお、天井効果が見られた項目は「いつでもやさしく受け入れてくれる（くれた）」「いつも、家族の幸せを祈ってくれる（くれた）」「プレゼントやお小遣いをくれる（くれた）」フロア効果があった項目は「勉強を教えてくれる（くれた）」であった。

更に主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は11.30, 2.13, 1.71, 1.41, …となり、4因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度4因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった（因子負荷量が0.4以下）8項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示す。なお、回転後の4因子で21項目の全分散を説明する割合は61.94%であった。

第1因子は「悩んでいる時など、必要なときにアドバイスをしてくれる（くれた）」「礼儀作法を教えてくれる（くれた）」「社会の習慣やルールを教えてくれる（くれた）」「人生についてアドバイスをしてもらえる（もらえた）」「地域の人たちとの付き合い方をおしえてくれる（くれた）」「人の一生について深く考えさせられる（られた）」「親のかわりに、私の身の回りの世話をしてくれる

表 2-1 高齢者役割尺度の因子分析 (宮古・八重山)

	I	II	III	IV
悩んでいる時など、必要な時にアドバイスをしてくれる (くれた)	.88			
礼儀作法を教えてくれる (くれた)	.70			
社会の習慣やルールを教えてくれる (くれた)	.68			
人生についてアドバイスをしてもらえ (もらえた)	.65			
地域の人たちとのつき合い方を教えてくれる (くれた)	.60			
人の一生について、深く考えさせられる (られた)	.46			
親のかわりに、わたしの身の回りの世話をしてくれる (くれた)	.43			
いるだけで、心の支えになる (なった)		.99		
何もしなくても、いるだけで安心感を与えてくれる (くれた)		.82		
家族の絆を強めてくれる (くれた)		.74		
人の命の尊さを教えてもらえ (もらえた)		.49		
親に叱られたとき、かばってくれる (くれた)		.49		
自分が年をとったときどうなりたいかを想像させてくれる (くれた)			.75	
伝統行事を伝えてくれる (くれた)			.74	
伝統を守ることの大切さを教えてくれる (くれた)			.60	
祖先から受け継がれていく家族の意味を考えさせられる (させられた)			.48	
自分のこれからの生き方を前向きに考えさせられる (させられた)			.46	
戦争の事を教えてくれる (くれた)				.81
先祖代々の様子を話してくれる (くれた)				.58
昔の言い伝えや生活の様子を話してくれる (くれた)				.50
人生を生き抜く強さを実感させてくれる (くれた)				.47

因子間相関

	I	II	III	IV
I	-	.55	.64	.49
II		-	.45	.45
III			-	.48
IV				-

(くれた)」の7項目からなり、「しつけ・社会化」因子と命名した。

第2因子は、「いるだけで、心の支えになる (なった)」「何もしなくても、いるだけで安心感を与えてくれる (くれた)」「家族の絆を強めてくれる (くれた)」「人の命の尊さを教えてもらえ (もらえた)」「親に叱られたとき、かばってくれる (くれた)」「自分が年をとったときどうなりたいかを想像させてくれる (くれた)」の5項目からなり、「情緒的役割」因子とした。

第3因子は「伝統行事を伝えてくれる (くれた)」「伝統を守ることの大切さを教えてくれる (くれた)」「祖先から受け継がれていく家族の意味を考えさせられる (させられた)」「自分のこれからの生き方を前向きに考えさせられる (させられた)」の5項目で「伝統伝承」因子とした。

第4因子は4項目で構成されており、「戦争の事を教えてくれる (くれた)」「先祖代々の様子を話してくれる (くれた)」「昔の言い伝えや生活の様子を話してくれる (くれた)」「人生を生き抜く

強さを実感させてくれる (くれた)」で、「生活伝承」因子と命名した。

今後の分析は、各因子に含まれる項目の合計得点を項目数で除した値を合成得点として使用する。各下位尺度の平均と α 係数を表3に示した。 α 係数は.72~.87と高く、満足できる信頼性を示した。

表 3 高齢者役割の下位尺度間相関と平均、SD、 α 係数 (宮古・八重山)

	平均	SD	α
しつけ・社会化	2.46	0.73	.87
情緒的援助	2.66	0.79	.84
伝統伝承	2.41	0.74	.78
生活伝承	2.76	0.79	.72

表2-2の沖縄県の高中生全体の高齢者役割認知と比較すると、沖縄県で「人生展望」と命名した下位項目がすべての因子の下位項目として散在していることや「文化伝承」因子が「伝統」と「生活」に分けて見られることであった。伝統伝

表2-2 高齢者役割尺度の因子分析(沖縄県)

	I	II	III	IV
自分が年をとったときどうなりたいかを想像させてくれる(くれた)	.73			
人の一生について、深く考えさせられる(られた)	.65			
自分のこれからの生き方を前向きに考えさせられる(させられた)	.57			
人の死について実感させられる(させられた)	.50			
老いることの意味について考えさせられる(させられた)	.49			
人生を生き抜く強さを実感させてくれる(くれた)	.47			
何もしなくても、いるだけで安心感を与えてくれる(くれた)		.90		
いるだけで、心の支えになる(なった)		.68		
話し相手になってくれる(くれた)		.48		
家族の絆を強めてくれる(くれた)		.47		
一緒に遊んでくれる(くれた)		.45		
社会の習慣やルールを教えてくれる(くれた)			.72	
悩んでいる時など、必要な時にアドバイスをしてくれる(くれた)			.67	
人生についてアドバイスをしてもらえ(もらえた)			.67	
地域の人たちとのつき合い方を教えてくれる(くれた)			.54	
礼儀作法を教えてくれる(くれた)			.53	
家族の歴史を教えてくれる(くれた)			.41	
昔の言い伝えや生活の様子を話してくれる(くれた)				.67
戦争の事を教えてくれる(くれた)				.65
先祖代々の様子を話してくれる(くれた)				.62

因子間相関	I	II	III	IV
I	-	.56	.69	.55
II		-	.70	.45
III			-	.63
IV				-

浅井(2007)より加工して再掲

承因子の下位3項目は沖縄県全体では、因子負荷量が低かったものである。

2. 役割認知の検討

役割認知因子それぞれの差の検討を行うために、高齢者役割尺度の各下位尺度得点についてt検定を行なった。その結果、性別では、情緒的援助($t(79.88)=2.34, p<.05$)で女子の方が男子より有意な高得点を示した。出生順位、つまり長男・長女であるかどうかや高齢者(祖父母)と同居しているかどうかでは、有意な差は見られなかった。

最も差があったのは、高齢者に関する学習経験の有無であった(表4)。高齢者について授業を受けた経験の有る者は、無い者に比較して、有意にすべての下位尺度で高得点を示し、「しつけ・社会化」「伝統伝承」「生活伝承」で、有意に高い得点を示した。従って、学習経験の有無は高校生の高齢者役割認知に大きく影響を与える事がわかった。

また、具体的学習内容の「高齢者が学校を訪問

(招く)」「地域の高齢者との交流」「施設の高齢者との交流」「インタビュー」「知識の説明(講義)」「体験グッズ」「介助体験(生徒同士)」「調べ学習」「その他」を含め、学習経験の有無による差を見ると「高齢者が学校を訪問し先生になる」学習経験者のみが「しつけ・社会化」($t(78)=2.17, p<.05$)、「生活伝承」($t(81)=2.4, p<.05$)で、有意に高い役割認知を示していた。

表4 学習経験有無別得点(宮古・八重山)

		有	無	t値
しつけ・ 社会化	N	47	33	2.32*
	平均	2.6	2.23	
	SD	.70	.72	
情緒的援助	N	51	34	0.65*
	平均	2.71	2.6	
	SD	.76	.76	
伝統伝承	N	50	31	2.14*
	平均	2.54	2.19	
	SD	.76	.64	
生活伝承	N	50	33	2.64*
	平均	2.91	2.52	
	SD	.66	.64	

* $p<.05$

沖縄全体と宮古・八重山を比較すると、高齢者についての学習経験が役割認知を高めると同じ傾向と具体的学習との関連では異なる傾向が見られた。まず、沖縄県全体調査でも、「高齢者が学校を訪問し先生になる」ことは「情緒的援助」「文化伝承」得点を高くしていた。しかし、沖縄全体では「高齢者が学校を訪問し先生になる」事より有意に得点が高かった「地域の高齢者との交流」「施設の高齢者との交流」「高齢者絵のインタビュー」「高齢者に関する調べ学習」が、宮古・八重山の高校生では学習経験による役割認知に有意な差は見られなかった。

IV. まとめと今後の課題

本研究では、第一に、宮古・八重山の高校生が認知する高齢者役割尺度の作成を行った。

その結果、宮古・八重山の高校生が認知する高齢者役割は「しつけ・社会化」、「情緒的援助」、「伝統伝承」、「生活伝承」の4つの因子で説明する事ができた。沖縄県全体とは一部異なる結果であり、高齢者役割に伝承役割認知が大きいことを視野に入れたカリキュラムの検討が必要と思われる。

第二に役割認知に影響すると予想される個人特性、学習経験について検討した。性別、出生順位、高齢者との同居、高齢者に関する学習経験のうち、高齢者の役割認知差が最も大きかったのは、高齢者に関する学習経験の有無であった。

高齢者役割への期待、認知、遂行という側面を考えると現在の身近な高齢者の役割認知は今後の高校生の生き方にもつながり、家庭科が目指すライフステージごとの生活課題を主体的に解決する能力の育成にも繋がるであろう。また、本被調査者においては、高齢者との同居は17%に過ぎず、学校教育において高齢者について学ぶ意図の場面設定が必要である事が示唆される。本稿の「高齢者が学校を訪問して先生になる」学習経験は、高校生の役割認知に有意な差をもたらしたが、学習経験者自体の実数は11人と少なかった。調査対象を増やした検証を課題としたい。

第三に沖縄県全体と宮古・八重山の高校生が認知する高齢者役割、学習経験による認知差はちが

いが見られることから、学校現場での具体的なカリキュラム検討では、これらの特性を考慮し、内容の比重を考えていく必要がある。

また、本研究では、高等学校家庭に関する科目(1科目全生徒必修)の内容において「高齢者の生活と福祉」項目が設定されている高校生を対象としたが、今後は総合的な学習などで高齢者との交流取り組みが盛んな中学校でのデータ収集や分析を進めたい。

更に、沖縄県全体でも、宮古・八重山でも学習経験の有無で明らかに有意な差が見られた学習経験であるが、実際の授業には統制できない変数も非常に多い。今後も、養護性(支援度)や思考度なども含めて多方面からの授業効果の検討を進めていきたい。

なお、本研究は平成20年度文部科学省特別教育研究経費措置事業「長崎・鹿児島・琉球三大学連携 離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成 ―大学教員と小・中学校教員の相互授業訪問を軸として―」の一部である。

参考文献

- 浅井玲子. 沖縄の高校生が認知する高齢者役割―高齢者に関する学習と役割認知―. 日本家庭教育学会誌. 第50巻3号, 2007, p.169-175
- 荒井紀子, 神川康子, 渡辺彩子. 児童・生徒の福祉観・高齢者観とその背景要因(第1報): 生活活動の実態と高齢者観との関連. 日本家庭科教育学会誌. 第39巻 第1号, 1996, p.1-7
- 石川周子. 地域における交流と子どもの生活満足感. 日本家政学会誌. Vol.56 No.8, 2005, p.521- 531
- 久保加津代, 日隅佐喜子. 高校生の高齢者観: 高等学校家庭科教育における「高齢者の生活と福祉」の授業づくりのための一考察. 大分大学教育学部研究紀要, 17(1), 1995, p.115-124
- 宜保真喜子, 浅井玲子. 家庭科教育における高齢者に関する学習経験が高齢期思考度・高齢者支援度に及ぼす影響. 日本教科教育学会誌. 第30巻 第3号, 2007, p.41-47
- 永原朗子. 高齢者の生活環境への学習意欲に関する基礎的研究: 高校生を対象として. 日本家庭

- 科教育学会誌. 第40巻 第1号, 1997, p.1-8
- 前原武子, 金城育子, 稲谷ふみ枝. 続柄の違う祖父母と孫の関係. 教育心理学研究. 2000, p.12-127
- 前原武子, 竹村明子, 浅井玲子. 高齢者におけるソーシャル・サポートの授受と主観的幸福感, 琉球大学教育学部紀要. 第68集, 2006, p.297-307
- 守谷敏子. 高校生の高齢化社会に関する意識: 未来の家庭像と養成すべき能力. 日本家庭科教育学会誌. 第39巻 第1号, 1985, p.32-38
- 文部省. 高等学校学習指導要領解説 家庭編. 開隆堂出版. 2000, 340p
- 山川恵美, 倉盛三知千. 高等学校家庭科教育における福祉・高齢者学習についての一考察: 高校生の高齢者観との関わりから. 和歌山大学教育学部研究紀要教育科学. 第53集, 2003, p.137-150
- 渡辺彩子, 荒井紀子, 神川康子. 児童・生徒の福祉観・高齢者観とその背景要因(第2報): 生活活動の実態と高齢者観との関連. 日本家庭科教育学会誌. 第39巻 第1号, 1996, p.9-14
- 綿引伴子, 牧野カツコ. 女子高校生の高齢者についての関心と学習要求. 日本家庭科教育学会誌. 第39巻 第1号, 1993, p.51-58
- 渡邊欣雄. 世界の中の沖縄文化. 沖縄タイムス社, 1993, p.114-116